

ça pleut\il pleut —現代フランス語の“非人称主語” の ça をめぐって*

ça pleut/il pleut: ça comme sujet de l'énoncé impersonnel

春 木 仁 孝
Yoshitaka HARUKI

0. 序

フランス語の非人称構文は、一般に主語人称代名詞の3人称男性単数形 *il* を用いて作られる。典型的な非人称表現である天候を表す非人称の例をいくつか挙げておこう。

- 1) *il pleut* (= it rains)
- 2) *il neige* (= it snows)
- 3) *il tonne* (= it thunders)

一方、これらの *il* を用いた形に対して、民衆的な表現として主語に指示代名詞とされる *ça* を用いた表現が存在する。

- 4) *ça pleut*
- 5) *ça neige*
- 6) *ça tonne*
- 7) *ça grêle*

また、日常会話においては、後続の不定詞、節と呼応し合う仮主語として *il*, *ce*, *ça* の交替が見られるが、本稿では扱わない。参考として、例を挙げておく。

- 8) *Il est défendu de klaxonner dans Paris.* (= It is forbidden to...)
- 9) *C'est défendu de klaxonner dans Paris.* (C' = ce)
- 10) *Ça n'est pas en écoutant beaucoup de disques qu'on devient pianiste.*

「レコードを沢山聞いたからといって、ピアニストになれるものではない」

本稿の目的は、1) 非人称において *ça* が用いられるとき、*il* を用いたときどのように違うのか、2) 非人称における *ça* の機能は何か、という2点を明らかにすることである。もちろん、非人称における *ça* の機能を明らかにするためには、非人称に限らず指示代名詞 *ça* の用法全体を検討する必要があるのは言うまでもない。ここ数年、フランスにおいても、*ça* の独自性、その特徴や機能についていくつか優れた研究が現れ、多くのことが解明されつつある。しかし、ここでは紙幅の都合もあり、とうてい *ça* の用法全体を論じることは不可能なので、非人称構文における *ça* を検討しつつ、*ça* の機能全体の解明に多少とも貢献できるように常に一般的な視野から問題を考えていきたい。

1. *ça* の用法

先ず *ça* について簡単に説明しておこう。フランス語の指示代名詞には、男女単複の区別のある *celui* (-ci/

-là), ceux, celle, celles と、そのような区別のない ce, ceci, cela, ça が存在する。ce は、être および être の前の devoir と pouvoir の前でのみ主語として用いられる。逆に、ça を主語として être の前で用いることはできない。ただし、否定の ne や助動詞の avoir がはさまる時には ça を用いることができる。être 以外の動詞の主語や、目的語、属詞としては ceci, cela または ça が用いられる。

- 11) C'est vrai./*Ça est vrai.
- 12) Ce/Ça doit être intéressant.
- 13) Ce/Ça peut être intéressant.
- 14) Ça/Ce n'est pas vrai.
- 15) Ça a été vrai.
- 16) Ça ne fait rien./*Ce ne fait rien.

伝統文法や学校文法では、ça はくだけた会話において cela に対応する形で、音声的に cela の縮約されたものとされてきた。従って、辞書の中には ça に独立した項目を立てず、cela の項目に送っているものさえある。確かに、例17), 18) のように、cela と ça が言語レベルの違いで交替し、ça の方がよりくだけた口調である場合も多い。

- 17) Cela/Ça va de soi. 「それは当然だ」
- 18) C'est cela/ça. 「その通りです」

しかし、例19), 20), 21) が示すように、必ずしも常に ça と cela を置き換えられるわけではない。

- 19) Ça y est./*Cela y est.
- 20) Ça va? /*Cela va?
- 21) comme ci comme ça/*cela

ただしここで注意しないといけないのは、代名詞の ça 以外に場所副詞の ça が存在したという事実がある点である。今日でも ça et là 「あちらこちら」のような熟語が使われるが、アクセント記号によって区別されていない場合についても、歴史的に混淆が起こった可能性が強いと考えられる。この点は、例えばゲルマン語では非人称の主語として英語の there, オランダ語の er, デンマーク語の der などのように一般に場所副詞に起源を持つ語が使われていることや、フランス語やスペイン語でも il y a の y, hay の y のように場所副詞が非人称構文に現れる点と考え合わせると非常に重要である。

2. これまでの説明

2.1. ここで、この ça を用いた非人称はこれまでどの様に考えられてきたのかを少し見ておこう。例えば BRUNOT (1965) は「ça はおそらくより表現的である」(p. 288) と言っているが、これが伝統文法の枠内での代表的な考え方と思われる。しかし、強調とか表現的 (expressive), さらに感情的 (affective) といった言葉で一見説明したような感じで済ませられる時代はもう終わったと言わねばならない。どの様な意味で強調なのか、どうして表現的なのかまで説明しなければ意味がない。また、GREVISSE (1975) は、ça は非人称の il に似て、漠然とした主語 (sujet vague), あるいは内的主語を表す場合があると説く。

一方、MOIGNET (1974) はギョーム言語学の立場から、人称を *personne d'univers* と *personne d'humaine* (あるいは *personne de sémantèse*) に分け、ここで問題にしている ça を、「話し手の外にあり、行為しない」人称である *personne d'univers* と性格付けしている。

ところで、非人称の *il* について、これを単に構文上の必要性から主語の枠を埋める全く意味のない形態素と考える筆者の立場とは違って、述部で表されている事態を取り巻く雰囲気、状況を表すと考えた人達がいた。このような *il* の解釈は全く問題にならないと思われるが、しかしこれは *ça* については何となく当てはまるような感じがするのも確かである。

2.2. 非人称の *ça* について比較的早くに興味深い観察をしているのは Gerold HILTY で、1959年の論文で、彼は *ça pleut* の *ça* はあくまで指示詞であり雨そのものを指していると分析している。*ça pleut* の *ça* を指示詞であるとする考えは他にもあるが、HILTY の論文で面白いのは、*ça pleut* の *ça* が指示代名詞として、漠然とした動作主 (*un agent inconnu*) や事態を取り巻く雰囲気 (*l'état général de l'atmosphère*) を指すのではなく、雨そのものを指すことを示すために証拠として挙げている現象である。それは、*ça pleut* のような非人称は否定では用いられないか、用にくいという事実である。

22) **Ça ne pleut pas beaucoup dans cette région.*

23) **Ça ne pleut pas beaucoup cette année.*

24) *Il ne pleut pas beaucoup dans cette région.*

すなわち、実際そこに雨が降っていない時には雨が存在しないので、その雨を指す *ça* を使えないと言うのである。希にそのような否定文が見つかる場合も、それは誤った類推によるものであると HILTY は言う。一方、同様に否定であっても、今まで存在したものが存在しなくなったことを示す例 25) のような文は問題なく使えると彼は指摘する。

25) *Ça ne pleut plus.*

HILTY は、結局、*ça pleut* というのは一種の存在文で、“*cette pluie est*”, “*telle pluie est*” というように説明できると言う。これに対して *il pleut* の方は、“*de la pluie est*” ということだと説明する。つまり、*il pleut* の方は特定の状況との関係に重点をおくことなく雨を一般的に捉えているのに対して、*ça pleut* の方は具体的な雨を問題にしており、まさにある時間における現実、特定の状況とのつながりに重点をおいた表現であるということである。

いずれにしろ、*il* に比べて場合、*ça* は大なり小なり指示代名詞としての機能を持っているというように分析する研究者が多く、フランス語を母語とする研究者はそのような分析を促す効果を直感的に感じているものと思われる。

3. 天候表現以外の用法

本稿の主張を展開する前に、もう少し *ça* の用例を見てみよう。

26) *Ça fume.* 「煙っている」

27) *Ça sent le brûlé.* 「焦げた臭いがする」

28) *Ça sent bon ici.* 「いい臭いがする」

29) *Ça va chauffer.* 「ひどいことになるぞ」

30) *Ça caille dur.* 「ひどく冷え込む」

31) *Ça glisse.* 「すべるよ」

32) *Ça barde.* 「事態は険悪だ」

33) Ça colle./Ça gaze./Ça baigne. (= Ça va.)

34) Ça me gratte. 「痒い」

35) Ça me démange dans le dos. 「背中が痒い」

これらの表現の特徴は、まさにその発話の場に密接に結びついていることで、「ここは」「これは」のような訳ができることが多く、実際に具体的な発話の場に結び付ける状況補語を伴っていることも多いこと、また、ça va, ça colle, ça barde, ça y est 等々の表現における意味上の主語は、健康、仕事、勉強、今現在していることなど、その状況で決まるという点である。

MAILLARD, CORBLIN, KLEIBER など、最近、指示代名詞としての ça についての研究を公にした人達は、概ね似たような結論に達している。それは、il, elle のような照応詞とは対照的に、ça は指示対象がはっきりと限定できない、まだ一つの概念として名前を持っていないもの、ある概念としてクラス分けされていない何かを指すというものである。その点は、以下の例からもはっきりと分かる。

36) Ce qu'il dit, ça/*il m'ennuie. 「彼が言っていることには困ったもんだ」

37) De le voir là, ça/*il me crève le cœur.

38) Qu'il ait réussi, ça/*il ne vous réjouit pas.

(3例とも HÉRIAU, p. 77 による)

つまり、関係節、不定詞、節の内容などは il で受けることはできないが、ça はまさにそのようなものを受けることができるのである。

現場指示、あるいは言語外指示で ça が用いられる場合は、日本語の「あれ」とか「それ」にあたり、名前の分からないもの、名前の思い出せないもの、名前を特に言いたくないものなどを指して使われる。この場合、注意しなければならないのは、指示対象がクラス分けされて名前を持ったものであることと、指示対象をそのようなものとして扱うことは本質的には関係がなく、話者の意志によるという点である。従って、眼前にあるものを指して使われる用法 (cf. *Donnez-moi ça. 「それを取ってください」*) も含め、ça の用法全体に共通しているのは、そのような指示対象の捉え方、指示の仕方にあると言える。

さらに面白い用法として、普通は人称的に使われる動詞を ça を主語にして用いると、集合的効果が生まれる点である。

39) Oh, mais ça travaille ici. 「おや、(みんな) 精がでることですね」 (CORBLIN, 1987)

40) Mais, qu'est-ce que vous avez ce matin? Ça baille, ça dort...

「みんな今朝はどうしたんだい、あくびをしたり、居眠りをしたり...」 (筆者採用例)

41) Dans ce film, ça tue, ça viole, pire encore.

「この映画では、殺人やら、暴行やら、もっとひどいことも出てくるよ」 (CORBLIN, 1987)

これらの例では ça の代わりに il を使うことはできない。この種の例を CORBLIN は、「ça の指示対象の輪郭がはっきりせず、発話状況と一つに溶け合っている」というように説明している。また HAGÈGE は、ça を人称性を低くする形態素と捉え、次のような例を挙げているが、これも CORBLIN などと近い立場と見做せる。

42) Ça pense trop. 「ちょっと考え過ぎだよ」 (HAGÈGE, 1982, p. 96)

結局これらの用法は、既に述べたような性格を持つ ça で人間を指すことにより、人間をある意味でモノ化していると分析できる。言葉を変えて言うならば、KLEIBER が言うように人間というのはモノに較べて既にある程度の範疇化を受けており、ça で指示されることにより範疇化の度合が低くなる。そこから、場合によっては

HAGÈGE の言うように人称性を低くする形態素というように捉えることもできるし、CORBLIN の言うように指示対象の輪郭が曖昧になって発話状況と融合しているというように捉えることもできるのである。またこのモノ化するという働きにより、ça が具体的な人を指して使われるときには、よく知られているように多くの場合軽蔑的な、また時として親愛のニュアンスが生じるのである。

43) Les filles, c'est bête... Mais ça a des antennes. Ça devine tout.

「女の子ってのは、ばかなんだ...だが勘がいいんだ。なんでも感づくからな。」

(朝倉 (1980), p. 52)

4. ça と定位操作

4.1. ここまでは、ça が非人称表現およびそれ以外の類似表現で用いられる場合と、それらの用法に対して提案されている説明を簡単に見てきた。以下では、ça pleut のような構文に用いられる ça の機能の中で最も重要と思われるが、これまでの説明の中ではしかるべき位置を与えられていない機能について見てみたい。これから述べることは、これまでに紹介した分析や説明の中に既に直観的な形である程度触れられてはいるのだが、レベルの分離が行われなまま述べられているので、明確になっていないのである。

さて、自然言語の発話を分析する際には、三つのレベルを考慮する必要があると思われる。これについては、例えば HALLIDAY や DANES, HAGÈGE など、何人かの研究者が名称や考え方の違いはあれ、既に主張している。筆者も、意味構造、文法構造、伝達構造という三つの構造を区別する必要があることを述べたことがある。表層に最終的に現れる発話というのは、この三つの構造の相互の緊張関係、せめぎあいの中から、ある一つの可能な解決として作り出されるものであると考えられる。このような考え方の中では、ça pleut の ça がどのように位置付けられるかを考えてみよう。ここでは、最も分かりやすいと思われる HAGÈGE の用語を借りて分析してみよう。HAGÈGE は、形態・統語的観点、意味と指示の観点、発話の階層構造の観点という三つの観点から発話を捉えようとする。

まず、形態・統語的観点、つまり文法関係の構造においては、ça pleut の ça は非人称構文の主語である。これは、非人称構文の il についても同様である。次に、意味と指示の観点からは非人称主語の ça は、動作主を指すのでも非動作主を指すのでもなく、いわば漠然と発話の状況、あるいは発話の場で話し手と聞き手の間で理解し合えることを漠然と指していると考えられる。例 39) の ça travaille のような一見集合的な ça も、その場に居る人々を明確な輪郭を持ったものとして指しているのではなく、CORBLIN が言うように発話の状況の中に人称性が含有され、結局は ça は発話の状況を指していると考えられる。従って、ça pleut の ça も雨そのものではなく、雨の降っている状況を漠然と指しているのである。⁽¹⁾ このことが、多くの研究者が直観的に述べてきたことと対応しているのである。「漠然と指している」ということの意味をさらに検討する必要があるが、そのこと自体は本稿の目的には直接関係しないので、ここではこれ以上深く追求はしないで先に進むことにする。

問題は、どうして il を用いた非人称が存在するのに、一方で ça を用いた表現が存在するのかという点である。それでは、第3のレベル、つまり HAGÈGE の言う発話における階層の観点、筆者の言葉で言えば伝達構造という観点を導入することによりこの問題に答えることができるかどうかを検討してみよう。発話の階層、伝達構造というのは、情報が発話の中でどの様に構造化されているかという点から発話を見たものである。細かい点は省略して簡単に言うならば、テーマとレーマがどのように発話の構成の中で振り分けられているかが分析の対象である。筆者は既にこのテーマの観点から、ルーマニア語の目的語の前置と繰り返しについての研究をロマン

ス語研究に発表した。そこでは詳しく述べる余裕はなかったが、テーマというのは、一般に流布している「それについて語られるもの」という定義では不十分であるというのが筆者の考えである。テーマというのは、「発話内的には述定操作の領域を指定する」と定義すべきものである。このように定義することにより、日本語、中国語、朝鮮語などのいわゆる二重主語構文や、場所、時間の副詞句などがテーマの役割を果たしている場合も統一的に説明することができる。

しかしこの定義のテーマという概念を *ça* に適用することはむずかしい。なぜなら、*ça* が指示しているのは、明確な輪郭を持たないものであり、明確な輪郭を持たない以上、「それについて語る」こともできなければ、「述定操作の領域を指定する」資格も持っていないからである。

4.2. 以上のように、発話の分析に三つのレベルを導入しても *ça* の分析に対してはうまくいかない。ここで、*ça* の機能を解明するために定位操作という概念を導入したい。定位操作というのは、個々の発話を発話の状況に定位する操作のことである。

発話というのは、先行の文脈あるいは状況に結び付くことにより、コミュニケーションの中で安定した位置を得ることができるのであり、この操作は発話構成の出発点である。主語の部分が指示内容を持たない非人称にはいわゆるテーマはなく、黒田の言う「二重判断」と「単一判断」という区別で言えば「単一判断」の発話であるが、しかしこの定位操作はやはり必要なのである。テーマを持つ発話においては、定位操作の痕跡がテーマの中に埋没してしまうことが多いが、非人称においては多くの場合テーマがないだけにこの定位操作の痕跡がより明示的に現れる。^[2] フランス語の非人称においては、以下の例に見られるように、*y*, *en*, *lui* などの小辞や、場所や時間に関する副詞句を伴っていることが多いが、これらは一般に定位操作の痕跡であり、存在を表す *il y a...* の *y* もそのような痕跡が固定したものと考えられる。^[3]

44) *Il y régnait une forte odeur de pipe.*

45) *Il lui pousse de la barbe.*

46) *Il en résultait les pires difficultés.*

47) *Il y a, dans ce village, une belle église.*

これらの要素は、いわば非人称発話を先行文脈や発話の状況に結び付ける働きをしているのであり、実際、容認可能性の低い非人称発話にこれらの小辞をつけることで容認可能性を改善することができる。

48) ?*Il mangeait trois étudiants. <Il y mangeait trois étudiants.*

「そこで三人の学生が食事をしていた」

5. 結論

存在文の *il y a...* においては、文法的主語と発話操作の痕跡が *il* と *y* という形で分担されているが、既に触れたようにゲルマン系の言語では一般に、*there*, *der*, *er* など場所副詞を起源とする要素が単独でこの二つの機能を果たしている。まさにこのようなケースに近いのが、フランス語の *ça* の場合であると考えられる。

非人称表現であっても何らかの形で状況へのつながりを表したいという欲求、つまり定位操作を明示的に行いたいという欲求が *ça* の使用を促したのだと考えられる。このように考えたとき、かつて *ça* という場所副詞が存在し、指示代名詞と思われる *ça* がその場所副詞的な *ça* と混着を起こしたということがよく理解される。普通、*il pleut* に対して *ça pleut* は民衆的な形であると言われる。実際そうなのだが、これは単に言語レベルの

問題ではなく、民衆の言語、すなわち日常的な言語においては、より直接的な形でコミュニケーションの際の必要性が言語化されるということであり、本稿の主張の裏付けとなっていると言える。ça pleut の実例が、多くの場合 bien などを持って感嘆の色合いを帯びていることも、この表現が具体的な発話状況と結び付いたものであることを如実に示している。現代フランス語においては、人称発話においても il は単に人称表示の接辞 clitique であるに過ぎず、非人称発話においては指示機能もないわけだが、ça は漠然としたものではあれ指示を行っていると言える。その意味で、ça pleut は純粹の非人称発話ではないのである。

注)

*) 本稿は、1990年5月20日に日本ロマンス語学会第27回大会（於京都産業大学）において発表したものである。内容的には、春木（1983）の続編と行うことができる。

- (1) ça が雨そのものではなく、雨の降っている状況を指していると考えても、HILTY の挙げている統語的証拠はそのまま有効である。
- (2) これは、非人称発話においては主語がテーマになり得ないという意味でテーマの出現が有標であるということである。
- (3) フランス語の非人称発話における定位操作とその痕跡については、春木（1983）を参照されたい。

参考文献：

- 朝倉季雄（1980）：『フランス文法ノート』白水社
- 練尾毅（1990）：「指示代名詞 ça の用法について」『アカデミア 文学・語学編48号』 p. 33-59.
- 春木仁孝（1983）：「フランス語の非人称構文—副詞的要素の機能と énonciation」『フランス語学研究17号』 p. 18-35.
- 春木仁孝（1988）：「非人称発話における状況補語について—定位操作とテーマをめぐる」『言語文化研究14号』 p. 245-262.
- BAARSLAG, A. F. (1964): "Le sujet neutre *il, ce, cela*", *Revue des langues vivantes* 30, p. 3-14.
- BOLINGER, D. (1977): *Meaning and Form*. London: Longman.
- BRUNOT, F. (1965): *La pensée et la langue*. Paris: Masson et Cie.
- CADIOT, P. (1988a): "Ça à l'oral: un relais topique", *Linx* 18, p. 77-93.
- CADIOT, P. (1988b): "De quoi ça parle? A propos de la référence de ça, pronom-sujet", *Le français moderne* 56, 3-4, p. 174-192.
- CORBLIN, F. (1987): "Ceci et cela comme formes à contenu indistinct", *Langue française* 75, p. 75-93.
- FURUKAWA, N. (1989): "Le SN générique et les pronoms Ça/Il(s)", *Modèles linguistiques* 11-2, p. 37-57.
- HAGÈGE, C. (1982): *La structure des langues*. Paris: PUF. (日本語訳『言語構造と普遍性』白水社)
- HENRY, A. (1977): *Etudes de syntaxe expressive*. Bruxelles: Université de Bruxelles.
- HÉRIAUX, M. (1980): *Le verbe impersonnel en français moderne*. Paris: Champion.
- HILTY, G. (1959): "“Il” impersonnel, syntaxe historique et interprétation littéraire", *Le français moderne* 27, p. 241-251.
- KLEIBER, G. (1987): "Mais à quoi sert le mot chose?", *Langue française* 73, p. 109-128.
- LARTHOMAS, P. (1988): "Notes sur ça, ci et l'alternance i/a en français", dans *Hommage à la mémoire de J. Stéfanini*. Université de Provence. p. 271-279.
- MAILLARD, M. (1974): "Essai de typologie des substituts diaphoriques", *Langue française* 21, p. 55-71.

- MAILLARD, M. (1985): "L'impersonnel français de "il" à "ça" ", dans *Autour de l'impersonnel*. Grenoble : Ellug. p. 63-118.
- MAILLARD, M. (1987): "Un zizi, ça sert à faire pipi debout!: les références génériques de ça en grammaire de phrase", dans G. KLEIBER (éd): *Rencontre(s) avec la généralité*. Paris: Klincksieck.
- MANOLIU-MANEA, M. (1990): "French neuter demonstratives: evidence for a pragmasemantic definition of pronouns", dans J.N. Green & W. Ayres-Bennett (eds): *Variation and Change in French, Essays presented to Rebecca Posner on the occasion of her sixtieth birthday*. London: Routledge.
- OLSSON, H. (1986): *La Concurrence entre il, ce et cela (ça) comme sujet d'expressions impersonnelles en français moderne*. Umea: Umea University.
- ORR, J. (1963): "Réflexions sur le français ça", Dans *Essais d'étymologie et de philologie françaises*. Paris: Klincksieck.